

はたらくこと、 「はたらくこと」

この本は、12人のまちの仕事人が、自らの仕事の技と人生について語った記録集です。

この本の仕事人たちは、決して、著名人というわけではありません。しかし、自分の仕事はどう人の役に立つのか、地域でどのような意味をもつのかを、考え試行錯誤しながら、ささやかな誇りをもつてやってきた人々です。

仕事人の言葉から、はたらくことや生き方のヒントになることをぜひ発見し、それを自らの「キャリアデザイン」に役立てていただければと願っています。



大切なものを守る

〈家族で考える防犯対策〉

田中鐘一

グリーン警備保障株式会社代表取締役社長
とりしまりやく



今までは同じ業界や経営者の方にお話をする事が多かったのですが、今日は若い方が多いようです。わたしも一五年前までは学生でした。昭和四三（一九六八）年一月一三日生まれの三八歳さいです。

わたしは警備事業を手がける会社の経営をしています。社員数は六〇名ほどで、道路工事の際の交通誘導警備ゆうどうやイベント警備、業界で言う機械警備などを行っています。これまで地元で開催かいさいされるお祭りなどの交通規制の警備・企画きかくをしてきたほか、平成一五（二〇〇三）年に開催された日本女子オープンゴルフ、二度の航空ショーの警備を担当したこともあります。また、大手事業所の関係者の出入管理の守衛業務しゅゑい、夜間の建物内の巡回警備じゆんかい、防犯防災機器の設置、護身用具やカーセキュリティ用品の販売はんばい、自主警戒システムや緊急コールシステムの提案などもしています。

経営理念と三つの行動指針

会社は昭和五九（一九八四）年一月二一日、先代であるわたしの父・田中順二が創業しました。わたしは二代目です。機械警備業務から始めて、翌年には交通誘導警備とビル清掃管理もやるようになりました。

わたし自身は昭和六二（一九八七）年に大学生になって、アルバイトとして家業を手伝っていました。入社は平成三（一九九二）年です。翌四年、父の闘病生活にともなって、取締役営業部長の肩書きを頂き、平成七（一九九五）年三月、父の他界とともにわたしが代表取締役就任し、現在に至ります。

わたしの会社では、自分たちが地域社会に存在する意義というものを、しっかりと示そうということ、四年前に経営理念を作って掲げています。その経営理念とは、「わたしたちは警備・清掃という事業活動を通じて、高い技術を提供し、安全で安心に暮らせる豊かな地域社会づくりに貢献します。そしてわたしたちは、お客様とともに幸せを築きます」というものです。この経営理念に恥じない行動をしようということ、行動指針が三つあります。

一つ目の指針が、お客様とのコミュニケーションを大切にすることです。これは「思いやりの心」と表現しています。常にお客様の立場に立って、最良の安心・安全を提供するサービスを目指し、技術の向上に努めています。

二つ目の指針が、感謝の気持ちを忘れない。「ありがとうの心」です。お客様や地域社会の方々に感謝の気持ちを忘れず、お客様とともに、全社員が幸せになれる理想の企業を目指します。

三つ目が、挑戦し続ける「情熱の心」です。失敗を恐れず、それを糧として次に生かす努力をする。また、できない理由を考える前にできる方法を考えます。

こうした行動指針を掲げて、平成一六（二〇〇六）年七月で創業二二年、第二四期目に入りました。

自分の限界を超える努力を

子ども時代は野球が好きで、一時期は甲子園を目指してがんばっていました。また、星を見るのも好きで、望遠鏡で土星の輪を何時間も眺めて満足しているような少年でした。高校入学後は、野球は弟の方がうまかったので諦めてしまい、テニスをやったりオートバイに乗ったりしていました。その後、次第にオートバイレースにのめりこんでいきました。

オートバイは、将来はプロになりたいと思ったほどです。一八歳の時にライセンスを取りに行きましたが、その時に財団法人日本モーターサイクルスポーツ協会の神谷忠さんが仰った言葉が印象に残っています。それは、「君たちはサーキットを趣味として楽しむ人かもしれないし、世界グランプリを目指すライダーになるかもしれない。ただこれだけは覚えてほしい。人それぞれ限界はありますが、その限界の高さはみんな違います。それは自分でつくっている限界です。その限界の中で走っている成長や向上はあり得ません。その限界を1%でも2%でも超える努力をしてください。自分の限界を高めていくことで、成長することや向上することの喜びを感じてほしい」といったお話でした。今から二〇年前のことですが、いまだに忘れ

られず印象に残っており、わたしの人生の基礎になっています。大学四年間は家業を手伝うかたわら、バイクレースに夢中でした。今でもわたしの趣味はバイクキャンプで、いろいろな所を旅しながら、人との出会いや物思いにふけるのを楽しんでいます。

感謝を忘れず、恩に報いる

入社一年目はバイクレース中心の生活で、会社には迷惑をかけていたと思います。そのわたしが会社を継ぐ決意をしたのは、父が不治の病を告げられたからです。この時、初めて父の背中を見ながら、父がいかに自分を育ててくれたのがわかった。

そんな親を追いかけて家業を継ぐ決意をしたのが、平成四（一九九二）年でした。その時は経営の「け」の字もわからず、初めて学ぶということのように思います。当時、柏で経営セミナーが月に四、五回あり、そのすべてに参加した。しかし、知識だけを学んでも、何でもできるようになるというわけではありません。何でも知っている人間になるだけです。それで当時は、社長の息子ということもあって、よくベテラン社員と衝突しました。「おまえは社長のせがれかもしれないが、わたしは創業当初からやってきたんだ」と言われ、なかなか考えを理解してもらえず、よくやけ酒を飲んだものです。



そうした経験を通して、自分の思いというのは、感謝の気持ちがないと人には伝わらないということに気付かされました。感謝の気持ちを忘れない。相手の良いところをみつけてあげる。そして他者と分かち合う。そうしたことを学びました。

父は七回も医師から最終通告を告げられながらも気力ががんばり、三年三か月後に亡くなった。父が他界して一二年経ちますが、いまだに親の七光で商売をしています。父の世話になったから、と言っていろいろと応援してくれるのです。そこで気付いたことは、父はわたしなど、次の世代の人のためにやってきたのではないか、ということ。例えば、わたしがなんとかしてお世話になった人に恩を返そうとすると、ほとんどの人に怒られる。若いくせに恩を返すなんて生意気だということです。もし恩義を感じているのなら、うちの子どもが家業を継いだときには面倒をみてくれよ、と言われる。自分のがんばりは、子どもたちに返っていくんだということを学びました。

早くから会社経営にかかわったこともあって、社団法人野田青年会議所や関宿商工会青年部にも二四歳の時に入会し、今は副理事長といった肩書きも頂いて、地域社会を明るく豊かにする活動に励んでいます。経営の勉強も続けていて、中小企業家同友会に入って、経営理念を考えたり、金融を学んだりなどしています。

泥棒に入られない環境づくり

野田警察署の管轄では、一日に犯罪が八、九件あるそうです。ひったくりや盗難などが毎日

頻繁ひんぱんに起きています。それをわたしたちは忘れがちです。家の安全を中心とした、身近な問題、身を守ることをテーマに少しお話ししたいと思います。

警備業界では、機械警備という分野がありますが、近年その需要じようが伸びています。治安や安全に関して不安に思う人が増えていきますし、安心・安全への認識も高まっています。価格設定も業界の競争で下がってきており、一般いっぱんの家庭でも警備システムを入れやすい環境になっています。ただ「警備会社の警備システムを入れても、泥棒は捕とらまえてくれないでしょ」と言う人がいます。鍵屋業界でも「警備会社はいつでも飛んでくるわけじゃないからね」と言われますが、それは違います。

機械警備業務というのは、泥棒に入られにくい環境をつくることにあります。警備システムは安心・安全につながりますが、警備システムを付けたからといって完全に安全だと考えるのは間違いです。まずその認識は正さなければいけない。

警備会社の警備システムでこういう安心は得られるが、こういう部分は気を付けないといかないという認識をもつことが大切です。

警備システムのポイントはまだ建物づくりにあります。かつてはプライバシーを大事にするという言い方をしましたが、アパートなど、階段付近に外から見えない死角となっている場所がある。一軒家いっけんかでも、塀ひを高くしたり、庭に木をたくさん植えたりして、家の中を見えなくする。これは泥棒にとって格好の餌食えじきになります。今の泥棒はスーツや作業服を着て、堂々と入ります。インターホンを鳴らして留守を確認、あるいは事前に不在時間を調べておいて、正面から入っていく。そして建物のつくりが外から一切見えない、隣の家からも見えないとなれば、

泥棒にとっては作業がしやすくなります。まずそうした環境をつくらないことです。

ちなみにわたしの自宅は、塀は腰の高さで、その上は見通しのきく欄らんにしてあります。中は丸見えです。家族は、外から丸見えでプライバシーがないと言いますが、人が家の中に入るのを外から確認できるというのが目的に、そういう環境にしています。

センサーによって侵入しんぱんがあったことを感知できた、というのは、決して良いことではない。中に侵入される前に、威嚇いかくをしたり、近づけない環境をつくりだす。それを提案し、不審者ふしんが近づけない環境を整備するのが、警備会社の仕事だと言えます。

光と音を最大限に活用

不審者を近づけないようにするには、光と音を最大限に活用することだと言われます。

光ではセンサーライトがあります。例えば、町を歩いていて、パッと光るのがありますね。人を感知するとライトが作動するものですが、普通の人は点灯しても何とも思わない。それは悪いことをしていないからで、泥棒をしようという人はどうかというと、ライトを浴びると周りの環境が見えなくなるし、注目される、すなわち誰かに見られているのではないかと感じるので、犯罪心理学上有効であると言われています。暗い所で、センサーライトに照らされるというのは、ステージでスポットライトが当たるのと同じ感覚ですね。注目されているという心理が働きます。

また、監視カメラも効果的です。泥棒は監視カメラの付いた家はやはり避ける傾向傾向にあります。

す。何台も付けると百万単位のお金がかかって、一般の住宅では難しいと思われがちですが、一部をダミーカメラで済ませることもできます。カメラを要所要所に置いて、死角のない環境をつくるのです。

夜間、不審者を近づけないように、建物の周りに玉砂利を敷くとか、トタン板を敷くのも有効です。多少、美感を損ないますが、侵入を防ぐには有効です。

例えば、夜寝ている間に泥棒が枕元のかばんからお金だけを抜いていったという話もあります。本人は寝ていて気付かなかったようで、かえってよかったケースです。というのも、下手に騒ぐと、窃盗犯を強盗犯にしたり、殺人犯にしてしまうことになりかねませんから。身を守る上では、こういう場合は気が付いても動かないことが大切です。ではどうして侵入されたのか。今でも、夏は暑いから、網戸にして寝ている、という家は野田に限らずあちこちにありまます。こういう家は簡単に侵入されます。一階に限らず、横に建物があったり、一階に物置など足場になるものがあれば二階からも入ってきます。

いくらピッキングに強い鍵を付けていても、窓ガラスを強化していなければ意味がありません。ドアや窓などあらゆる侵入を想定して、いろいろなセンサーを企画し、設置するのが機械警備の仕事です。防犯機器や機械をつくる会社はたくさんありますが、それらを使って、企画力で、警備システムをお客様に提案していく。それが警備会社の仕事なのです。

振り込め詐欺を防ぐ

次に自分の身や家族を守るとい話です。振り込め詐欺の経験のある方はいますか。実はわたしの家に電話がかかってきたことがあります。「お宅の息子さんに、車ぶつけられちゃったんですけど」と。それで、息子は口をケガしている、事故の保障をしてもらいたいと電話口で言うんです。その後、タオルをくわえて震えた声で「もしもし、助けてくれ」とか言う。家内が「わたしじゃわからないから」と言って電話を切りましたが、後で嘘だとわかりました。この時、電話をとっさに切ったからよかったです。巧みな話しぶりで、人を慌てさせ、不安に陥れて、お金が必要だから早く、お金を振り込ませるのです。その手口はますます巧妙になってきています。

その他、あなたはインターネットでアダルトサイトを見ましたね、と請求書が届いて、何日までに支払ってくださいという。それが何枚もくるとい相談を受けました。法的に支払う必要があるのか警察に相談したら、そんな請求書が他にもたくさん保管されていて、「こんなにもあるから安心してください」と。これは架空請求詐欺と言われるもので、支払う必要など一切ありません。

とにかく、犯人はわたしたちを慌てさせ、動揺させて、お金を払わせようとしています。こういうやり方でお金を請求されても、決して振り込まないこと。振り込む前に、必ず、家族や親戚の人に確認したり、警察に相談することが大切です。

警察に必ず届ける

交通事故でもそうですが、事件や事故に遭った時は必ず警察を呼ぶことです。ちょっとだけだからとか、相手の名刺をもらったからとか、一切やっつてはいけない。必ず警察官に来てもらう。これを怠ってみんなひどい目にあっています。

例えば、ぶつけられて、ぶつけた側の人が「会議があつて急いでいるんです。ここに電話して」と言っていない。後で電話してみると、それは他人の名刺で、その人の所在がわからなくなる。自分がぶつけてしまった時もそうです。ぶつけたと言われても、それは前の傷かもしれないし、余計な請求をされるかもしれない。だから、まず警察に現場検証をしてもらう。警察は事故証明書を出します。警察はあなたが悪いとか良いとかは言いません。事故の責任については、保険会社の方で、何万例ものデータから、何対何の比率でどのくらいであると判断してくれます。しかしそうしたことも警察を問に入れないとできません。請求に対して後で申し立てても、なぜ事故があつた時に言わなかったのかとなつて、泣き寝入りになる。

また、相手がケガをしていれば、人身事故でひき逃げにもなりかねない重大なことです。ですから、どんな状態でも警察を入れて対応することです。

防犯ブザーが最適

野田警察署の管轄内で警察官が増えたとはいえ、一三〇人くらいしかいない。この人数で

二四時間三六五日働くわけですから、実質では、人口一五万人を四〇人くらいの警察官でみている状況です。事件発生率からみても大変だとわかります。ですから、泥棒に入られても警察は動いてくれないとか、車をぶつけられたのにお巡りさんが来るのに一時間もかかったとかいう話を聞きますが、事件性があるとか犯人が目の前にいるとかでない限り、他に優先すべきことはたくさんあるわけです。

「自分の身は自分で守る」という意識も必要です。護身用として、防犯スプレーやスタンガンなどを簡単に買えるようになってきていますが、使用の仕方を間違えると大変なことになる。持っただけとはいけないと言いますが、パニック状態など、冷静でない時は使つてはいけないと思います。実例として、暴行を受けそうになった人が防犯スプレーを使ったのに、風上に向けて噴射したために自分にかかつてしまったとか、暴漢に襲われてスタンガンを使おうとしたが、取り上げられて逆に使われたとか、笑い話のような本当のことがあります。

では、何が効果的かというと、大音量で威嚇する警報ブザーですね。帰宅が遅くなったりする女性には必需品です。警報ブザーを所持することは子どもでもできる防犯です。

また、子どもが誘拐などの被害にあわないためにも、携帯用の防犯ブザーは必携です。学校でも教えていると思いますが、一人で遊ばない、知らない人についていけない、知らない車には乗らない。何かあつたら大声で叫ぶ、とにかく逃げる。何かあつたら知らせる。また、家に知らない人が訪ねてきたら、玄関は絶対開けてはいけません。知らない人から物をもらうということもいけません。そうしたことは普段から子どもにしっかり伝えておきたいですね。

盗聴や盗撮についても触れておきます。以前、盗聴機器などのメーカーに飛びこみで行った

時のことです。機器の使い方などを詳細に説明してくれるのですが、そこは盗聴器のことだけでなく、盗聴発見器についてもよく知っている。それで、盗聴器を発見するノウハウを教わりました。盗聴器はみなさんが思っているような箱型だけではない。ペンやパソコンのマウス、電卓、コンセントの中に入ったものなどいろいろな種類があります。アパレル関係など、熾烈な競争のある業界では、企業同士の盗聴などは日常的だと言われています。このような世の中ですから、いつ、どこで何があるかわからない。

友だちを選べ

とにかく犯罪に巻き込まれないように注意したいものですが、犯罪に巻き込まれる時というのは、犯罪がそもそも起こりやすい環境にすることが多い。例えば、ゲームセンターで遊んでいる。もちろん、ゲームセンターで遊ぶことがいけないわけではありません。普段の友人同士でゲームをするならいいのですが、それがゲームセンターに入り浸るようになり、変な仲間をつくってしまうと、おかしな事件に巻き込まれやすくなる。

わたしは、よく父から「友だちを選べ」と言われました。その時は、おれが友だちを選ぶんだという気持ちがあつて、自分がしっかりすることで、同じ価値観をもっている友だち、親友を選びたいと思いました。しかし、それだけではなかった。実は友だちを選べという言葉の中には、ある友だちと馴染んでいく中で、例えば、勉強嫌いだっただのがそうでなくなるとか、尊敬できるような友だちと価値観を共有するとか、そのような意味があるのです。親友から受

ける影響は強いということです。

現在、親や同級生を殺したりといった、わけのわからない犯罪が増えていますが、みなさんには自分の価値観というのをしっかりもち、人間の尊厳を学んで生きてほしいと思っています。

地域への感謝の気持ちを忘れない

最近、会社のことを考える中で、地域密着型で地元を活かされている企業として、感謝の気持ちをもって全国にうって出る会社になりたいと思っています。

このことは初めはうまく社員に伝わりませんでした。社員がわたしに、「社長はこの会社を大きくしたくないんですか」と聞いてくる。わたしが現状維持だと言っていると思っただけです。だけどそれは現状維持の意味もわかっていない話で、これは努力をして今の状態を保つという意味であると説明をしました。営業をかけ、今の仕組みを維持しながら、現状を保つことはとても大変なことです。だけど、地域の人たちに支えてもらっている会社だから、地域を忘れて他にうってでて、見捨てられるような会社にはなつてはいけません。地域に活かされて、地域のための会社であり続けながら、全国に展開する会社にする。サービスでも商品でも、この会社を野田市から発信するんだ、と。

ですから、社員教育には全力で力を注いでいます。また、わたし自身が、価値観の高いものを学んでいこうと努力しています。うちの社長はバカだと思われては、優秀な社員から辞めて

いってしまおうと思っていますから、わたし自身も勉強し、また社員たちにももっと勉強してもらい、会社をよくしたいと思っています。

会社では、「この社員はできない」という言い方はさせない。なぜかというところ、できないというのは知らないということであって、知らないということは教えていないということ。だからこれは社内の教育担当者、幹部の責任になる。また、教育をできなかった社長が悪いということになる。こうして、「知らなければ教えてあげる」ことを社員教育の根本にしています。ただし、知らなくてできない人と、知っていてやらない人がいる。知っていてやらない人は人の足を引っぱります。例えば、当社には制服警備員は六〇人ほどいますが、一人がだらしない服装をしただけで、その個人だけでなく、会社全体がだらしないと思われる。何回注意しても改まらない、わかってもやらない人には辞めてもらいます。なぜならそれによって、他の社員の生活、その夢や、家族の生活までも脅かすからです。退社させるというのは、とても苦しいことです。その人の人生を狂わせてしまうかもしれないから。線引きをし、思いやりをもちながらしっかりとやっていきたい。

高齢者といまあつ

少子高齢化といわれていますが、高齢者の方とうまくつきあっていきたい。一時期は若い社員を集めて活気ある会社になりたいと思っていますが、九年前に家内との旅行でフロリダにあるデイズニーワールドに行つて、そこで高齢者と二〇代の若い人が、対等に、活気にあふれ

て働いている環境を見て、警備や清掃の世界の理想のように思いました。高齢者の経験やノウハウを若い人たちに与えてもらい、若い人たちの活力を高齢者の方々がもらうという、相乗効果で、元気な会社になりたいと思つたのです。それを今実践しています。

今も、多くの高齢者の方を雇用していますが、周りからはむしろ会社が若々しくなったという評価をいただいています。活力のある、元気はつらつとした高齢者、しっかりとした価値観と、夢をもつ人とおつきあいたいと思っています。経営者として利益を出すことも大事ですが、わたしはむしろ雇用の機会を増やして、多くの人に会社に働きに来てもらつて、その人たちと幸せを共有したいのです。

感謝、思いやり、情熱、正直という言葉が好きです。この気持ちをもち続けていきたい。その中で、正直は度が過ぎるくらいでもいいと思つている。正直であれば、何回聞かれても、同じことしか答えられませんが、そうだからこそしっかりと筋の通った生き方ができると思っている。感謝と思いやり、情熱をもって、正直な生き方をしていきたい。

いつも手帳に入れているのは、「世界を動かすもの、それは情熱である」という意味の言葉です。この言葉を大切に、これからも情熱をもってみなさんと語りたと思っています。

(平成一八年九月一七日開講)

